

Title	修論報告：批判的思考への動機づけ：好奇心の観点から
Sub Title	
Author	齋藤, 央典(Saito, Hisanori)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.203- 205
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2014年度大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修論報告

批判的思考への動機づけ—好奇心の観点から—

齋藤 央典

私たちは様々な場面で多くの疑問を生じさせている。そのような疑問に対して私たちは論理的な、あるいは合理的な答えを得るまで「考え抜く」という姿勢をしっかりと持っているだろうか。「考え抜く」ということは私たちにとって非常に重要なことである。これに関して、近年注目を集めているキーワードに「批判的思考」が挙げられる。

近年、多くの批判的思考研究者は、批判的思考には論理的な探究や推論を行う「技能」と物事をじっくり考えようとする「態度」の2つの側面があると考えている。確かに「できる」という技能を備えていても、その技能を発揮させなければそれはただの宝の持ち腐れであり、その一方で、批判的思考をしようと常日頃から思っている、そのような技能がなければただの空回りで終わってしまう。やはり、このことから批判的思考の「技能」と「態度」の両方を備えていることが重要であるということが言えよう。とりわけ日本の心理学領域では、平山・楠見（2004）の批判的思考態度尺度開発後、批判的思考態度に関する研究が盛んに行われることとなった。この尺度は4因子で構成されており、各因子は「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」「証拠の重視」と命名されている。その一方、批判的思考への動機づけを考える上で、重要であり、かつ、これまで批判的思考との関係が実証的にはっきりと測定されていない変数が他にもある。その変数の1つに好奇心（Curiosity）が挙げられる。

好奇心（Curiosity）は動機づけ研究において古くから扱われてきた概念であり、批判的思考への動機づけを考える上で有益な視座を与える可能性がある。しかし、批判的思考研究で扱われている好奇心概念に一貫性が保たれておらず、概念自体がぼやけてしまっているという問題が存在している。

好奇心の先駆的研究者として有名なのが Berlyne であり、今なおその領域において強い影響を及ぼしている。Berlyne は好奇心を拡散的好奇心と特殊的好奇心の2つに分類できると主張した。拡散的好奇心は知りたいと思う対象が定まっていないのに対し、特殊的好奇心は知りたいと思う対象が定まっている点に特徴がある。これまで特殊的好奇心と批判的思考の関連性を確認している研究は存在するが、拡散的好奇心と批判的思考の関連をみた研究は存在しない。そこで本研究では、批判的思考態度と好奇心とりわけ拡散的好奇心との関係性を明らかにすることを第1の目的とする。また、好奇心が批判的思考態度をどれだけ説明することができるのかについて明らかにすることを第2の目的とする。

方法

対象者 都内 3 大学 (私立 2、国立 1) に在学している大学生 129 名 (男性 73 名、女性 54 名、性別不明 2 名:平均年齢 19.6 歳:SD=1.4) を対象とした。有効回答率は 100%であった。

尺度 好奇心尺度として Litman&Spielberger (2003) を翻訳した尺度 (22 項目)、批判的思考態度尺度として平山・楠見 (2004) の批判的思考態度尺度 (33 項目) を使用した。

調査時期と手続き 2014 年 4 月に調査は実施された。教育心理学の授業では教材として授業内に、その他の授業では授業終了直後に一斉回答によって実施された。

結果

好奇心尺度に関して因子分析 (最尤法・Promax 回転) を行った。その結果、2 因子が抽出された。因子負荷量 0.4 未満の項目を除き、第 1 因子を拡散的好奇心 (ex.新しい考えや概念について考えることは楽しい) (13 項目: $\alpha=0.866$)、第 2 因子を特殊的好奇心 (ex.複雑な問題に関する解決策を見つけ出すことが好きだ) (6 項目: $\alpha=0.785$) と命名した。

批判的思考態度尺度に関しても因子分析 (最尤法・Promax 回転) を行った。その結果、3 因子が抽出された。因子負荷量 0.35 未満の項目を除き、先行研究を考慮した結果、第 1 因子を探究心 (ex.いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい) (8 項目: $\alpha=0.819$)、第 2 因子を論理的思考への自覚 (ex.複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ) (9 項目: $\alpha=0.817$)、第 3 因子を客観性 (ex.いつも偏りのない判断をしようとする) (8 項目: $\alpha=0.759$) と命名した。それぞれの因子の項目平均値を算出し、相関分析を行った (Table1 参照)。また、拡散的好奇心、特殊的好奇心を独立変数、批判的思考態度尺度から抽出された 3 因子を従属変数とし、重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table2 参照)

Table1 好奇心と批判的思考態度との相関関係

	探究心	論理的思考	客観性
拡散的好奇心	0.747**	0.233*	0.225*
特殊的好奇心	0.360**	0.337**	0.164

* $p<0.05$; ** $p<0.01$

Table2 好奇心が批判的思考態度に与える影響

従属変数	探究心	論理	客観性	全体
独立変数		標準偏回帰係数		
拡散	0.761***	0.083	0.137	0.449***
特殊	-0.026	0.277**	0.164	0.180*
調整済 R ²	0.552***	0.094**	0.054*	0.310***

* $p<0.05$; ** $p<0.01$; *** $p<0.001$

考察

Table1 より、拡散的好奇心と探究心との相関関係が 0.747 と非常に高いことから、好奇心尺度における拡散的好奇心のコンポーネントと批判的思考態度尺度における探究心のコンポーネントが非常に近似していることが明らかとなった。また、Table2 より、自由度調整済み決定係数が全ての従属変数において有意であった。さらに、拡散的好奇心から探究心、批判的思考態度全体に対する標準偏回帰係数が有意であり、特殊的好奇心から論理的思考への自覚、批判的思考態度全体に対する標準偏回帰係数が有意であった。これらのことから、拡散的好奇心が高まるとそれに伴い探究心や批判的思考態度全体が高まり、特殊的好奇心が高まるとそれに伴い論理的思考への自覚や批判的思考態度全体が高まることが明らかとなった。

【文献】

- 平山すみ・楠見孝 (2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論導出課題を用いての検討 教育心理学研究, 52, 186-198.
- Litman, J. A., & Spielberger, C. D. (2003). Measuring epistemic curiosity and its diversive and specific components. *Journal of personality assessment*, 80, 75-86.

(さいとう ひさのり 慶應義塾大学大学院社会学研究科)